

ルカによる福音書 第11章37節～44節

「できることはちゃんとある」

説教者:高橋 誠 牧師

37 イエスが話し終わると、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。38 ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、驚いた。39 主は言われた。「なるほど、あなたがたファリサイ派の人々は、杯や大皿の外側は清めるが、自分の内側は強欲と悪意で満ちている。40 愚かな者たち、外側を造られた方は、内側もお造りになったのではないか。41 むしろ、できることを施しとして与えなさい。そうすれば、あなたがたにはすべてのものが清くなる。42 それにしても、あなたがたファリサイ派の人々に災いあれ。あなたがたは、ミント、コヘンルーダ、あらゆる野菜の十分の一は献げるが、公正と神への愛をおろそかにしている。これこそ行うべきことである。もつとも、十分の一の献げ物もおざりにはできないが。43 あなたがたファリサイ派の人々に災いあれ。あなたがたは、会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好んでいる。44 あなたがたに災いあれ。あなたがたは、人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気付かない。」

●本当に直せるのは造り手

車でスマホのナビを便利に使いますが、しばらく前、車の電源端子から充電されていないと気づきました。充電器の故障と思い、買い換えませんがそれでも充電できません。ヒューズの不具合とにらんで、ヒューズボックスを探し当てますが、たくさんヒューズで、どれがどこにつながっているかわかりません。購入したのが自動車会社の系列店でしたから、定期点検のついでに修理をお願いしました。やはり故障はヒューズで、わずか600円であっさり直りました。製造したところだから、その構造や仕組みを知っていて直せるという

ことでしょう。

私たちは、自分の内面の、故障、おかしさには、嫌というほど気づきます。内面の故障箇所も、悪感情とか、自分への妙なこだわりとか、大体わかります。けれども、どこをどう触れれば、自分の心が乗り越えられるのかは、途方に暮れます。自分の心であっても、決して自由にはできずに持て余すというのは、どういうことでしょうか。

まるで心は自分のものではないかのようです。主イエスは、私たちの内側は造り主がお造りになったと言われます。内側は自分が作ったのではないからこそ、人間の内側は真実には作り得ないことを知るべきです。造り主によって内側が作られたということを知らないままの対処は大きく言えば二つ、どうにもならないと悩むか、あるいはもうどうにもならないので蓋して終わらせるかのいずれかでしょう。

●内側への鈍さ

今日お読みしたところでは、ファリサイ派の人々が登場しまして、この人々は自分の内側に蓋をした部類の人が多かったようです。ファリサイ派とは、当時、最も真面目な信仰のグループです。安息日になると会堂に集まって、モーセの律法や預言者の言葉の朗読し、中にはそれらを説く人々もいました。そう言う意味では、最も内面に気を遣っているような人々です。しかし、内側は強欲と悪意で満ちていると、主イエスは彼らについて言われます。その内面の取り組みが何かお飾りのようだということです。律法を厳格に守って、内面が整えられ、養われているふりをしているのです。けれども、それが内側に蓋をした手前での取り組みで、外面を取り繕うことに終始しているのです。

モーセの律法は大切ですし、それが善い生き方を作り出すのは確かです。しかしそれは、内から外へという動きです。逆は——すなわち、外から

内へ至る方法はないのです。それはまるでたった一つの石が、きれいな波紋を池全体に及ぼせるようなことです。それに対して、彼らは池の岸辺に波があればそれらしいと言って、いろいろとするのです。ミント、コヘンルーダ、野菜の十分の一を献げると言われています。中でも、コヘンルーダは、あまりにも匂いが強烈で、好みの分かれる香草で普通は献げ物の対象外だったのに、彼らはそれを殊勝に献げるのです。その真面目に見える取り組みが立てる波のいびつきです。殊勝と言えどそうなのですが、どこか奇をてらって人と自分との差を印象づけようとしているのです。その姿は、会堂での上席、広場での挨拶を好んでいるところに現れていまして、それは偉さを求めることですし、権力欲と言ってもよいでしょう。

ある新約聖書の学者は、ルカはファリサイ派を引っ張り出して笑わせるために書いたのではなく、これはルカが知る当時の教会だと言います。目に見えるあり方ばかりにこだわるのです。形を整えれば、それで済むと思うのは、愚かさだと主イエスは言われます。主イエスもそれを嘲って責めているわけではありません。「災いだ」は、原文では「ウーアイ」です。口惜しいと言われる主の呻きです。なぜならば、ここにこそこの内側の強欲と悪意にこそ、神と真実に出会う場所があるのに、そこに向き合わないからです。

私が神学校に学んだ当時、ある同級生に「高橋君はいつも笑顔だけど、時々寂しそうな顔をしているよね」と言われ、何か見抜かれたとドキッとしたことがありました。一所懸命、学び、奉仕してはいるのですが、それが人前に牧師候補生として振る舞うということになってしまっているような思いが残っていたからです。もちろん、その全部が嘘というわけではないのですが、どうもメッキ感というか、表面的なような思いが残るのです。善い行いをしておいて、複雑な思いに巻き込まれるのです。偽物感というか、どうも奉仕がひとすじの心からのものになり得ないでいることを内側で気にしているのです。

●内側は、主との出会いの場である

主イエスは、改めてここでそれを取り上げておられます。そこにこそ内側を造り給う神の手が働

くからこそ、そうなるのです。

祈祷会の聖書研究では、創世記第12章アブラハムの旅立ちを共に学びました。主が示された約束の地カナンに到着して、そこに祭壇を築き主の名を呼びます。飢饉が激しくエジプトへ退き、第13章に入って再びカナンの地に戻り祭壇で祈ります。二つの祈りは、括弧のようなもので、その間に何をしていたかが第12章の後半で語られています。赴いた先のエジプトでは、美女の妻サライが権力者に狙われ、夫の自分も邪魔者として殺されると案じ、妻に「妹と言ってくれ」と吹き込みます。エジプトでは本当にファラオに召し抱えられます。神によって妻は守られはするのですが…。二つの祈りの間には、エジプト人もあきれられるアブラハムの姿があります。祈りを重ねる生活が、生活の改善や良い自分ができていくことに食い込んでいるかと問えば、どうも心許ない。

祈祷会でも触れたことですが、フランス文学者、哲学者の森有正という人の「アブラハムの信仰」という名講演があります。彼は、アブラハムは自分の恥の中で神に出会うと言います。こんな風に語っています。

「人間というものは、どうしても人に知らせることのできない心の一隅を持っています。醜い考えがありますし、また秘密の考えがあります。また、密かな欲望がありますし、恥がありますし、どうしても他人に知らせることができないある心の一隅というものがあり、そういう場所でアブラハムは神さまにお目にかかっている。そこでしか神さまにお目にかかる場所は人間にはない。人間が誰はばからずしゃべることができる、観念や道徳や、そういうところで人間は神さまに会うことはできない。人にも言えず親にも言えず、先生にも言えず、自分だけで悩んでいる、また恥じている、そこでしか人間は神さまに会うことはできない」。

アブラハムの内面は、その罪のゆえに深く、豊かに作られるのです。私たちの信仰の足取りも、この信仰の父と同じではないでしょうか。主日礼拝と主日礼拝の間に何をしていますでしょうか。その心の一隅での思いのすべてをここで開陳することなど恥ずかしくてできたものではありません。しかし、それを拭い去ってここに来るのではないのです。むしろ、それを引きずって来つつ、

そうしてこそ神の恵みの豊かさを知るのです。

つまり、信仰者とは、今とは違う本物らしくなったら、やっと本物の信仰者だと名乗れるようになるのではないのです。今、ありのままの自分が神に呼びかけられている、それを正面から受けとめるのが、真の信仰者です。ファリサイ派の人々は、内側に蓋をしたからこそ、これからずれたのです。しかし、信仰とは内側で、心の一隅で神を出会う、これ以外ではありません。

●神のゆえにできることはある

この神の揺るぎなき恵みを信じるときに真実に内側が作られていきます。この恵みに基づいて、「できることを施しとして与えれば良い」と主は言われます。あなたのできることに力はあつたのだ、と主イエスは励ましてくださるのです。

「できること」はいろいろな訳の可能性がある言葉です。欄外中のついた聖書をお持ちの方は、そこに「内にあるもの」という解説があるのをご覧いただけます。他の訳の聖書では、「とにかく、うちにあるものを施せ」となります。こうした訳も多いのです。これと同じような訳をする人の中に、「とにかく杯や盆の内ものを施してみよ」と訳す人がいます。40節の杯と盆（大皿）を、この41節で改めてくっつけて訳しています。40節の杯と大皿の内側は、強欲と悪意が満ちているのですが、それをそのままに、清めている暇（いとま）もないままに施せとおっしゃるのです。「むしろ」（41）は、「とにかく」とも訳せますので、主の御思いはやはりそうした、施しに強欲と悪意が混ざっても、不十分だという思いが残っても「とにかく、不十分など気にせずに行いなさい」ということです。私たちは躊躇するばかりです。

けれども、主イエスは「そうすれば、すべてのものが清くなる」とまで言われます。「すべてのもの」ですから、これはずいぶん踏み込んだ発言、ぐいぐいと清さに向けて進んでいくような主イエスのご発言です。不十分なものでも、すべて清くなるのです。主イエスの御思いは、清くするのはご自身だというお考えでしょう。「すべてを清めるのはあなたがたが自分で」と言われれば、私たちは途方に暮れます。だからこそ、この意味は「すべては、神の働きにおいて、神の責任において」

ということでしょう。そもそも、聖書でずっと語られてきているきよめは、人のわざではありません。聖なる神が清めてくださる、それ以外ではないのです。

「すべて」というのですから、内側の強欲も悪意も、そのすべての中に入ります。内側のすべては神の力強い御手がかけられています。それゆえに、強欲も悪意も野放しにはならなくなっているでしょう。実際に、すでに悩んでいるのですから。人を貶める悪口も良い茶飲み話のネタ、酒の肴にもなり得ますが、主イエスを知れば、「ああ、また人を貶めてしまった」と悩みます。あるいは、キリスト者でなくとも、内に残る嫌な思いは、あなたの内側が神に作られ、あなたが本当の愛の豊かさを求めている証拠と言えます。悩むことは大切です。悩みの中で、神が、あなたを作ってくださいからです。

●善の戦いの指揮官主イエスのもとで

改革者ルターは。残存する強欲や悪意、いわゆる罪深さと戦った人物です。彼はこう言います。「罪は、それが戦いの中であって、未だ支配者ではない限りにおいて、聖徒のために役に立つように定められている」。罪が去らず、強欲も悪意も去らず、罪の悩み、戦いの中にあっても、戦いの指揮官が、その戦いを掌握してくださっています。どうせ罪人だとやけにならないで、罪に押しつぶ、なお押し返しつつ、罪と戦うのです。「潔癖」という意味で立派な信仰者とは呼び得ませんが、それでも私たちは中途半端な信仰者ではありません。指揮官キリストのゆえに、今日、ここで立派な信仰者なのです。まだ主と共に戦っているからこそ、ここで祈っています。

それゆえに、律法が人の道として真実に示す公正と神への愛を、おろそかにしないでそれに生きられます。公正さとは、「出会う人の大小、好き嫌いにかかわらず、善を行うこと」です。神への愛とは、「恵みの神に瑞々しい心で愛を献げ、神の愛に結ばれること」です。悩みながらも、不十分でも、とにかく善に生きればよいのです。

そうすると、善を行う姿が変わります。罪人がそれを施したに過ぎないからです。善を行ったからといっても、人に誇れたものではありません。

誇らかに胸を張るファリサイ派の善行とは異なる善行、指揮官主イエスのもとで肩をすくめるように善行を行う姿となるでしょう。できることはあなたにもある、と主は言われるのです。